

クルドの農業と農民 <その2>

クルドの穀物

クルド地域の主要生産穀物は、小麦と大麦である。小麦はイラク人の主食として最も重要な穀物である。レストランに入ると、食べきれないほどのイラクパンである「ナン」が出される。一方、大麦は主に家畜用飼料として利用されている。ここでは、主食である小麦栽培を中心に Erbil での知見を紹介していきたい。

クルド地域の小麦栽培は、比較的恵まれた降雨を利用して、主に天水で栽培が行われている。しかし、天水依存の栽培は、降雨状況(雨量、降雨時期)に大きく影響されるため、栽培面積、収量とも年変動は大きく、1980 年以降の 20 年間のデータでも、栽培面積は 20 - 60 万 ha、収量は 400 - 1,300 kg/ha、そして収穫量は、12 - 65 万 ton となっている。

さて、クルドの小麦栽培は冬作である。Erbil 近郊での農家を見学した 5 月の光景は、収穫までにあと 2 週間程度の時期であった。小麦栽培の主な農作業は、耕起・播種・収穫に分けられる。耕起して播種した後は、除草剤の散布をすることもあるが、基本的に収穫まで、手をかけることは少ない。一般的に、耕起と収穫は、農機を使って行われている。トラクターの普及も進んでいるが、それでも多くの農民は、賃借によるトラクターやコンバインで耕起・収穫作業を行っている。一方、播種は、小規模農家では手作業で行われている。種子生産は、自家採種によるものが多いが、一部では政府による種子配給も行われている。



品種の異なる小麦畑

天水栽培では、収量は降水に大きく依存し、収穫の保証がないためか、施肥量は一般的に少ない。主な肥料は尿素か燐安肥料である DAP で、約 120kg/ha 程度と聞いたが、これも手持ち資金がどれほどあるかで大きく違ってくる。ただ、安定した水源のある河川近郊の沖積地や灌漑施設

のある農地では、安定した収量が得られるため、施肥や除草などの管理作業も手厚く行われている。天水栽培の収量は 1 ton/ha 前後に対し、灌漑地では 2 - 3ton/ha 以上まで増やすことができる。

このため、政府の支援もあり、最近ではセンターピボットなどの灌漑施設が導入されてきている。訪問したある篤農家は、冬の小麦と夏のトウモロコシの専業農家で、170ha の農地に 6 基のセンターピボットを導入していた。しかも、自前調達だ。おそらくクルドでも最大規模の小麦栽培農家と見た。施設導入により、収量は約 5 倍になったと聞いた。ちょっと、気になったのが水管理である。灌漑水量・灌水間隔の決定は、地主の経験的知識のみで行われていた。感心するものの、水管理の技術指導は、節水や経済性から考えても有効かと感じた。

最近の小麦栽培の大きな課題はさび病発生と聞いた。さび病が蔓延すると収穫に大きな打撃がでる。政府もこの対策に努めており、海外からさび病の耐性品種の導入試験を行っていた。

さて、農家は生産した小麦を Erbil に 2 箇所ある貯蔵施設(サイロ)に出荷し、全量を国に販売する。買い上げ価格はイラク国内で統一した価格として、毎年決められており、品質、乾燥度合い、不純物の混雑などで等級別に価格が設定されている。



Erbil の小麦サイロ

小麦生産には、多くの政府補助金が投入され増産支援を行なっている。また、政府買い入れ価格は保証され、農民の安定した収入源となっているとともに、国民へは小麦の無償配給も行っている。長期的に見れば、補助金依存体質が定着してしまうことも懸念されるが、現在、イラクでは小麦の増産に力を入れており、天水栽培が可能なクルド地域は生産拠点地として重要な地域とされている。